

各関係機関長 様

熊本県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）
令和2年度（2020年度）発生予報第6号を下記のとおり発表しましたので送付します。

令和2年度（2020年度）病害虫発生予報第6号（9月予報）

I 気象予報：令和2年（2020年）8月27日福岡管区気象台発表（単位：％）

◎向こう1ヶ月の気象予報（単位：％）

予報対象地域	要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
九州北部全域 (含、山口県)	気温	10	10	80
	降水量	30	30	40
	日照時間	30	40	30

II 【今後、注意すべき病害虫】

1 発生の概要

作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
普通期 水稲	穂いもち	並	並	やや少(-)	やや多～ やや少(±)	降水多(+)	巡回調査 (葉いもち)
	トビイロウンカ	多	並	やや多(+)	多～並 (+)	気温高(+)	
大豆	ハスモンヨトウ	やや多	やや多	やや多(+)	やや多～並 (+)	気温高(+) 降水多(-)	フェロモントラップ調査 合志市 やや少 八代市 やや少 阿蘇市 並 (-)
	カメムシ類	並	やや少	並(±)	並(±)	気温高(+)	予察灯調査 シジカメシ 並 アオカメシ やや 少 (-)



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」

作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
チャ	炭疽病	並	並	並(±)	並(±)	降水多(+)	
	カンザワハダニ	やや多	並	並(±)	並(±)	気温高(+) 降水多(-)	御船町 やや多(+)
	クワシロ カイガラムシ	並	並	並(±)	並(±)	気温高(+) 降水多(-)	
カンキツ	黒点病	やや多	並	やや多(+)	やや多～並(+)	降水多(+)	宇城市 平年比やや少(-)
	かいよう病	やや多	やや多	多(+)	やや多～並(+)	降水多(+)	宇城市 平年比やや多(+)
	ミカンハダニ	やや多	並	やや多(+)	やや多～並(+)	気温高(+) 降水多(-)	宇城市 平年比やや少(-)
ナシ	黒星病	やや多	やや多	多(+)	並～やや少(-)	気温高(-) 降水多(+)	
	ハダニ類	やや少	少	少(-)	並(±)	気温高(+) 降水多(-)	
果樹全般	果樹 カメムシ類	やや多	やや少	—	カンキツ やや多～並 ナシ やや多～並 カキ やや多(+)	気温高(+) 降水多(-)	予察灯・ フェロモントラップ調査 合志市 多(+) 宇城市 多(+) 天草市 多(+)
夏秋 トマト	葉かび病	やや多	並	やや多(+)	やや多 ～やや少(±)	気温高(+) 降水多(+)	
	すすかび病	並	やや多	並(±)	やや多 ～やや少(±)	気温高(+) 降水多(+)	
	灰色かび病	並	少	少(-)	並(±)	気温高(+) 降水多(+)	



作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
イチゴ	炭疽病	やや少	並	並(±)	並(±)	気温高(+) 降水多(+)	
	ハダニ類	並	やや少	並(±)	やや多～並(+)	気温高(+)	
	アブラムシ類	並	やや少	やや少(-)	やや多～並(+)	気温高(+)	
夏秋 キュウリ (高冷地)	べと病	やや多	やや多	—	やや多(+)	気温高(-) 降水多(+)	
夏秋 果菜類 (平坦地)	コナジラミ類	並	並	—	ナス やや多～並 メロン やや多～少(+)	気温高(+)	黄色粘着板 トラップ調査 熊本市 やや多 山鹿市 やや少 菊池市 少 (-)
	アザミウマ類	並	並	—	ナス やや多～並 メロン やや多～少(+)	気温高(+)	
	ハスモンヨトウ	並	並	イチゴ 並 トマト 並 (±)	ナス やや多～並 イチゴ 並 トマト 並 (+)	気温高(+)	フェロモントラップ調査 合志市 やや少 八代市 やや少 山都町 やや少 阿蘇市 一の宮 並 波野 並 (-)

※予想の根拠末尾の括弧書きは、(+)は発生を助長する要因、(-)は発生を抑制する要因、(±)は影響が少ない要因であることを示す。



2 予想発生量、根拠、対策等

◎普通期水稻

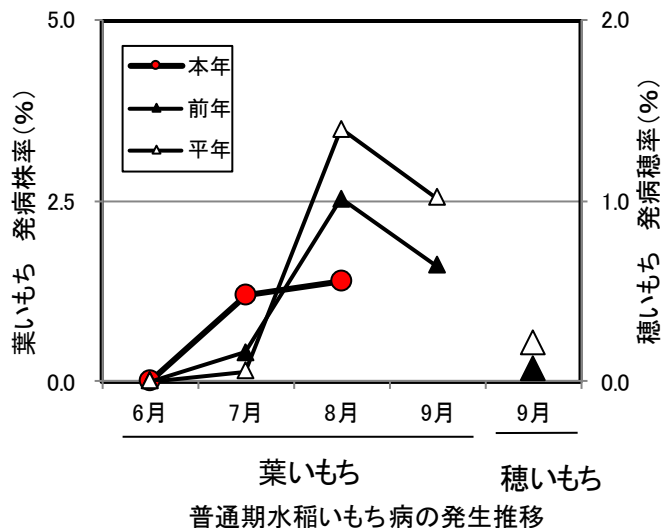
1) 穂いもち

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、葉いもちの発病株率1.4%（平年3.5%）で、平年比やや少の発生であった（－）。

(3) 対策 ア ほ場を観察し、上位葉で葉いもちの発生がみられる場合は穂いもちの発生源となる恐れがあるので、薬剤防除を行う。

イ QoI剤は県内で耐性菌が発生しているため、すでにQoI剤を使用したほ場では他系統の薬剤で防除する。



2) トビイロウンカ

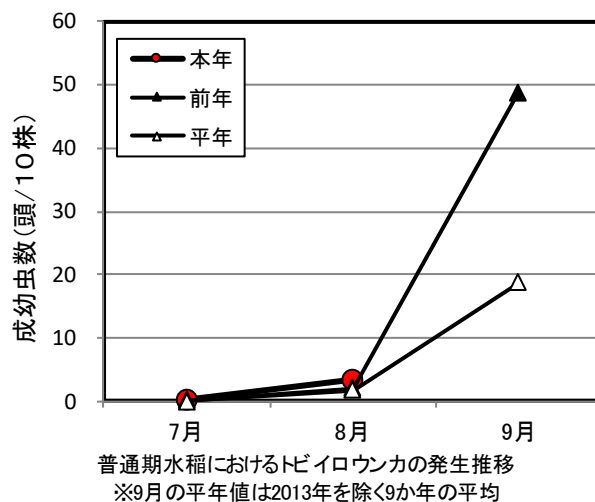
(1) 発生量：多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、10株当たり寄生頭数は3.4頭/株と平年（1.8頭/株）比やや多、また多発した前年（2.1頭/株）に比べやや多の発生であった（＋）。

(3) 対策 ア 9月に急激に増加する可能性もあるので、ほ場での発生状況を確認し、要防除水準（収穫30日前10株当たり30頭）に達したら直ちに防除を行う。

イ 水稻の株元に生息しているので、粉剤及び液剤で防除する場合は株元に達するように散布する。

ウ 防除の詳細は、令和2年8月17日付け発生予察警報第1号を参照する (<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/R2/yosatu/200817keihou.pdf>)。



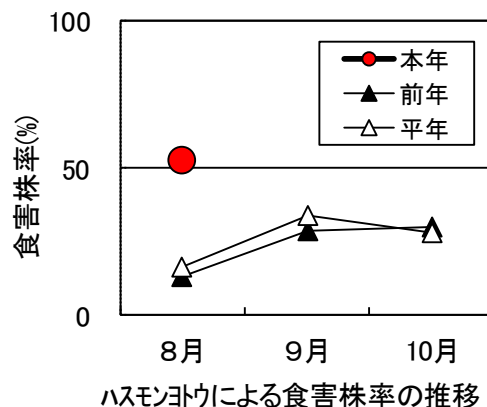
◎大豆

1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、食害株率は52.3%（平年16.6%）と平年比やや多、10株当たりの幼虫数は3.1頭（平年1.4頭）と平年比やや多の発生であった（＋）。

イ フェロモントラップによる7月第5半旬～8月第4半旬の誘殺数は、阿蘇市一の宮が1432頭（平年1193頭）で平年並、合志市栄が529頭（平年958頭）で平年比やや少であった（－）。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

[「http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/」](http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/)

(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するため、若齢幼虫の食害により白色化した被害葉（白変葉）が認められたら防除を行う。

2) カメムシ類（ホソヘリカメムシ、アオクサカメムシ、ミナミアオカメムシ、イチモンジカメムシ）

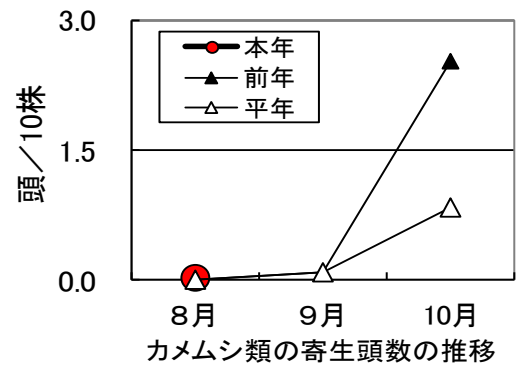
(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発生は認められなかった（平年の10株当たり寄生頭数0.0頭）（±）。

イ 病害虫防除所（合志市）の予察灯調査での、8月第1～5半旬の誘殺数は、ミナミアオカメムシが73頭（平年48頭）と平年並、アオクサカメムシが32頭（平年72頭）と平年比やや少であった（-）。

(3) 対策 ア 開花終期から子実肥大期において、7～10日おきに2～3回の薬剤防除を行う。

イ アオクサカメムシ、ミナミアオカメムシに対するピレスロイド系薬剤の効果は劣るので、ほ場での発生種を確認して薬剤を選択する。



◎チャ

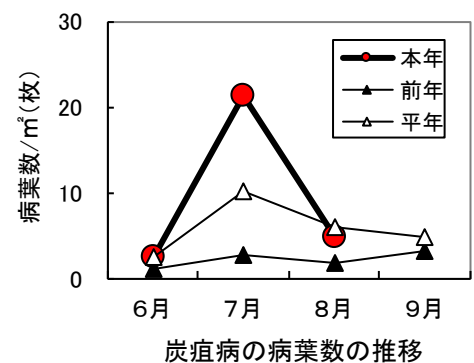
1) 炭疽病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、1㎡当たり病葉数が4.8枚（平年6.0枚）と平年並の発生であった（±）。

(3) 対策 ア 秋期の発生は翌春の一番茶の収量や品質に及ぼす影響が大きいため、摘採残葉の発病状況に注意し、新芽生育期（萌芽～1葉期と2～3葉期）に2回の防除を行う。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーション使用する。



2) カンザワハダニ

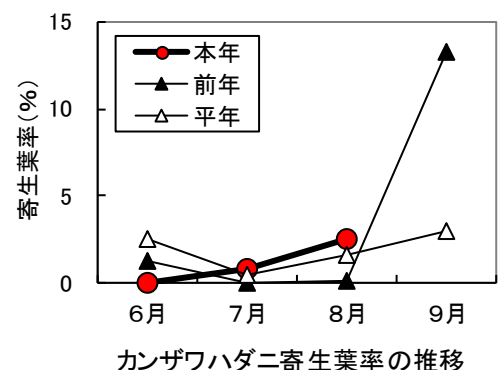
(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生葉率2.5%（平年1.5%）と平年並の発生であった（±）。

イ 茶業研究所（御船町）の8月第5半旬の調査では寄生葉率43%（平年6%）と平年比やや多の発生であった（+）。

(3) 対策 ア ほ場での発生状況を確認し、密度が高い場合は、規定の散布量で葉裏まで薬剤が届くよう丁寧に防除を行う。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



3) クワシロカイガラムシ

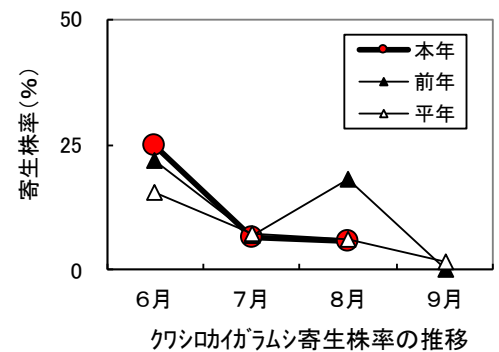
(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生株率5.6%（平年6.0%）と平年並の発生であった（±）。

(3) 対策 ア ふ化最盛日は今後の気温により変動し、地域によってばらつきもあるので、ほ場をよく観察するとともに発生状況に注意して防除時期を判断する（最新のふ化最盛日予測は病害虫防除所HPに掲載）。

イ 幼虫は、苗木や農機具に付着して分散する場合もあるので、育苗、苗木購入、摘採等管理作業で分散しないように十分注意する。

ウ 防除適期は、ふ化最盛期（卵塊全体の60～80%になった時期）で、防除に当たっては規定の散布量を内部の枝まで薬剤が届くよう丁寧に散布する。



◎カンキツ

1) 黒点病

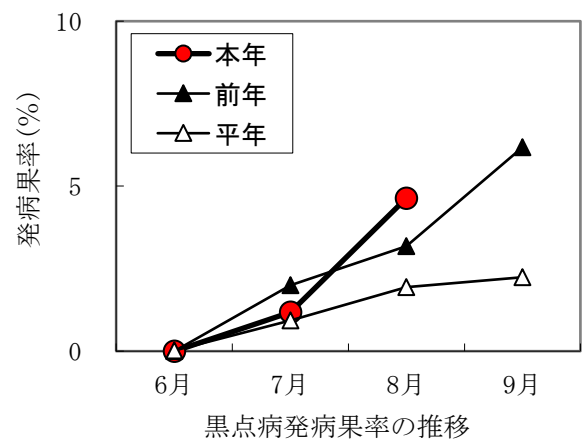
(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病果率4.6%（平年1.9%）と平年比やや多の発生であった（+）。

イ 果樹研究所（宇城市）の予察ほ場では、8月第5半旬の果実発病度は32.0（平年49.1）で平年比やや少の発生であった（-）。

(3) 対策 ア 保菌率が高い直径5～10mmの枯枝は、伝染源になるので剪除し、園外で処分する。

イ 前回の散布から累積降水量が200mm～250mmを越えた時期、または25日～30日経過した時期を目安に防除する。



2) かいよう病

(1) 発生量：やや多

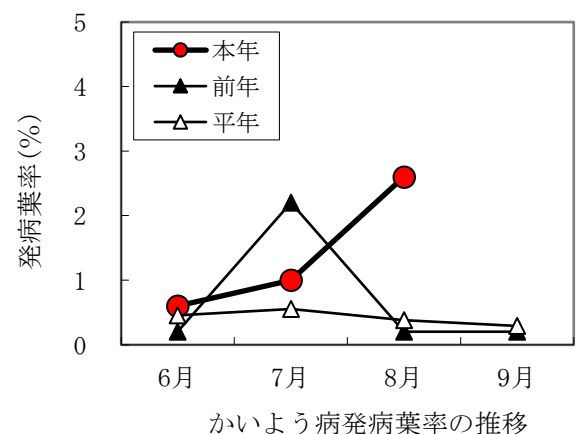
(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、一部のほ場で多発生がみられ、発病葉率2.6%（平年0.4%）、発病果率2.2%（平年0.3%）で、平年比多の発生であった（+）。

イ 果樹研究所（宇城市）の予察ほ場では、8月第5半旬の発病葉率は46.0%（平年30.9%）で、平年比やや多の発生であった（+）。

(3) 対策 ア 伝染源となる発病葉や枝、果実は除去する。

イ ミカンハモグリガの食害痕は、本病が発病しやすいので防除および剪除を行う。

ウ 強風による葉や枝の損傷を少なくするため、防風樹がない園では防風網を設置する。



3) ミカンハダニ

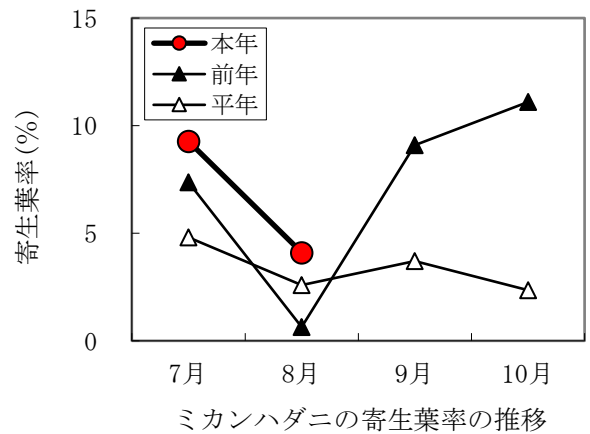
(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、雌成虫の寄生葉率4.1%（平年2.6%）、寄生頭数1.0頭/10葉（平年0.7頭/10葉）と平年比やや多の発生であった（+）。

イ 果樹研究所（宇城市）の予察ほ場では、8月第5半旬の雌成虫の寄生葉率10.0%（平年7.4%）、寄生頭数1.5頭/10葉（平年2.2頭/10葉）、平年比やや少の発生であった（-）。

(3) 対策 ア 定期的に園を観察し、雌成虫の寄生葉率が30～40%、または雌成虫の寄生頭数が10葉当たり5～10頭に達した場合は防除する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーション使用する。



ミカンハダニの寄生葉率の推移

◎ナシ

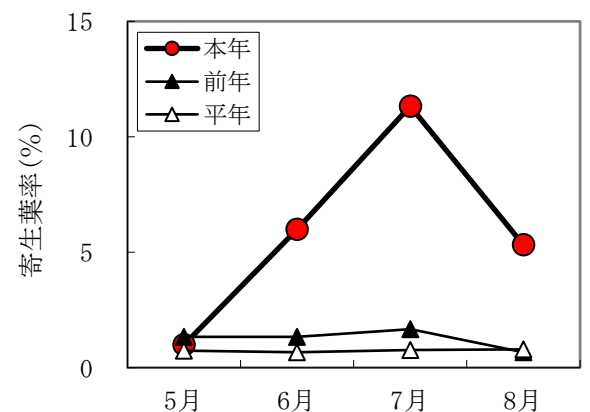
1) 黒星病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病葉率5.3%（平年0.8%）と平年比多の発生であった（±）。

(3) 対策 ア 秋期の降雨によって感染したりん片や葉が翌春の伝染源となるため、収穫後から落葉期（9月中旬～11月中旬）までに2～3回の薬剤防除を行う。

イ 園内の落葉は、越冬伝染源となるため、園外へ持ち出して処分する。



黒星病発病葉率の推移

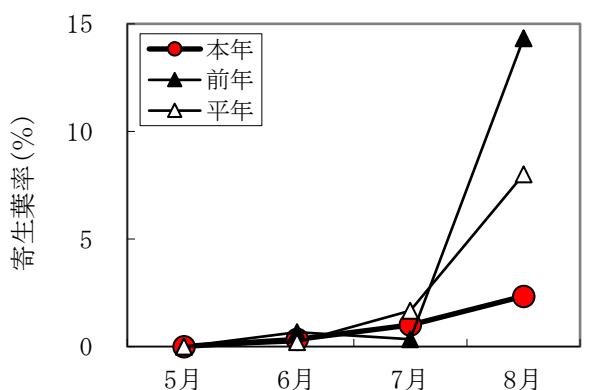
2) ハダニ類

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、雌成虫の寄生葉率2.3%（平年8.0%）と平年比少の発生であった（-）。

(3) 対策 ア 定期的に園を観察し、雌成虫の寄生葉率が30%以上、または雌成虫の寄生頭数が1葉当たり1～2頭に達した場合は防除する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーション使用する。



ハダニ類の寄生葉率の推移



◎果樹全般

1) 果樹カメムシ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月下旬におけるヒノキ球果に寄生する成幼虫数は0.5頭/5枝(平年3.5頭/5枝)と平年比少であった(−)。

イ 8月第1～4半旬の各地点の誘殺数は、表1のとおり合志市、宇城市、天草市で平年比多であった(+)

(3) 対策 ア 飛来初期は局在し、発見が遅れやすいため、園内をよく見回り、早期発見および発生初期の防除を行う。

イ カメムシ類は夕暮れ時に園外から侵入し、翌朝飛び去るため、夕方や早朝の防除が有効である。

ウ 収穫期間近くに薬剤を散布する場合には、薬剤の使用時期に注意する。

エ チャバネアオカメムシ及びツヤアオカメムシの予察灯及びフェロモントラップの誘殺数データを病害虫防除所のホームページに掲載しているため、最新の誘殺状況を確認し、防除要否や防除適期の参考にする

(<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>)。

表1 各地域のカメムシ類の誘殺状況(8月1半旬～8月4半旬)

地域名	チャバネアオカメムシ						ツヤアオカメムシ					
	予察灯			フェロモントラップ			予察灯			フェロモントラップ		
	本年	平年値	平年比(%)	本年	平年値	平年比(%)	本年	平年値	平年比(%)	本年	平年値	平年比(%)
合志市	322	333	97	2,224	30	7,413	81	200	41	23	0	-
宇城市 (松橋町)	2,391	972	246	18,028	201	8,969	310	446	441	69	3	2,300
天草市 (本渡町)	10,016	2,675	374	16,246	612	2,655	135	539	25	139	9	1,544

単位：頭、平年比(%)：(本年誘殺数/平年値)×100

◎夏秋トマト

1) 葉かび病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、一部多発は場が見られ発病株率14.3%(平年6.0%)で、平年比やや多の発生であった(+)

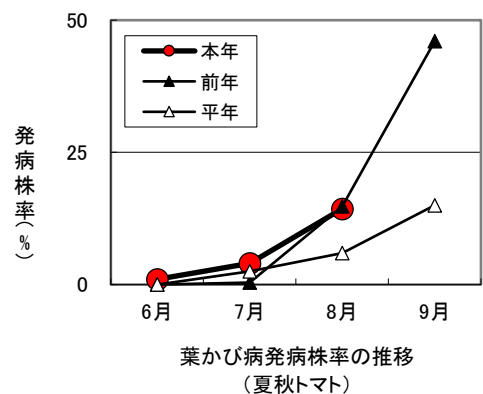
(3) 対策 ア 摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。

イ 被害葉や老化葉は早めに除去する。

ウ 肥料切れや着果負担による草勢低下は、本病の発病を助長するので適切な肥培管理に努める。

エ 9月の秋雨の時期は曇雨天が続くことが予想されるため、気象予報に留意し、晴れ間を見計って計画的に防除を行う。

オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

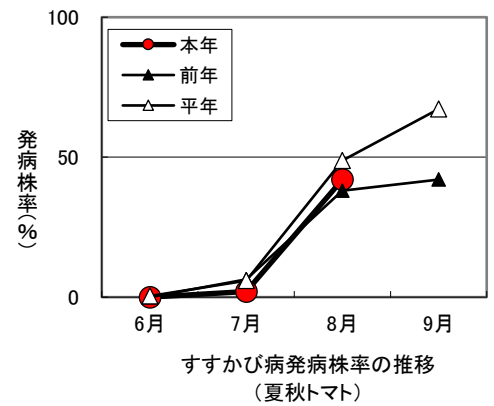


本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

[「http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/」](http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/)

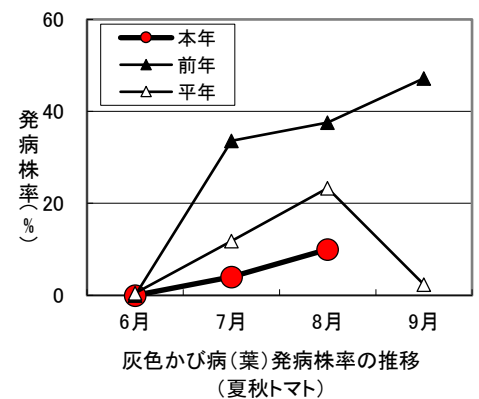
2) すすかび病

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、一部多発ほ場が見られ発病株率42.0%（平年48.8%）で平年並の発生であった（±）。
- (3) 対策 ア 摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。
イ 被害葉や老化葉は早めに除去する。
ウ 9月の秋雨の時期は曇雨天が続くことが予想されるため、気象予報に留意し、晴れ間を見計って計画的に防除を行う。
エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



3) 灰色かび病

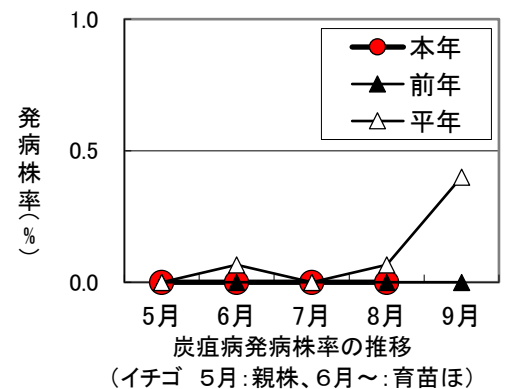
- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、葉の発病株率が10.0%（平年23.3%）で平年比少の発生であった（-）。
- (3) 対策 ア 摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。
イ 被害葉や被害果、老化葉は早めに除去する。
ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎イチゴ

1) 炭疽病

- (1) 発生量：やや少
- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発生がみられず（平年0.1%）、平年並であった（±）。
- (3) 対策 ア 発病株は早期には場外に持ち出し、ビニール袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。（**3防除のポイント等の「イチゴ定植前のうどんこ病、炭疽病およびハダニ類の防除対策」**を参照）。



- イ 頭上かん水を避け株元に手かん水する。
- ウ 育苗ポットの間隔を広げ、不要な下葉を除去し通風採光を良くする。
- エ 定植苗の選抜を徹底し、本ぽや育苗ほにり病株を持ち込まないようにする。
- オ 発病後の薬剤散布は効果が低いため、予防散布に努める。特に、降雨後および摘葉、ランナー切除後は感染しやすいので必ず防除する。薬剤散布は株元まで十分かかるように行う。

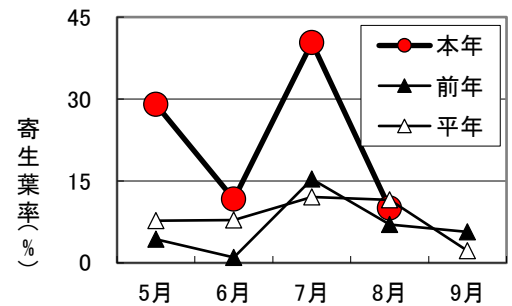


2) ハダニ類

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では寄生葉率10.0% (平年11.5%) で平年並の発生であった(±)。
- (3) 対策 ア 本ぼに持ち込むと防除が困難となるため、育苗期の防除を徹底する(3防除のポイント等の「イチゴ定植前のうどんこ病、炭疽病およびハダニ類の防除対策」を参照)。

イ 薬剤防除の際は、薬液が葉裏に十分かかるように、苗の間隔を十分確保し、丁寧に散布する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



ハダニ類寄生葉率の推移
(イチゴ 5月:親株、6月~:育苗ほ)

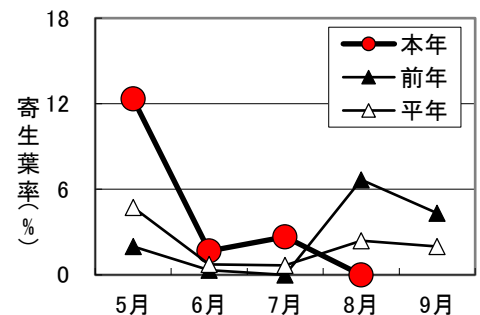
3) アブラムシ類

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では寄生葉率0.0% (平年2.4%) で平年比やや少の発生であった(-)。
- (3) 対策 ア 本ぼに持ち込むと防除が困難となるため、育苗期の防除を徹底する。

イ 育苗床や本ぼ周辺の雑草は定期的に除草する。

ウ 若い葉の裏や未展開葉に寄生していることが多いため薬剤防除の際は薬液が寄生部位に十分かかるように丁寧に散布する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



アブラムシ類寄生葉率の推移
(イチゴ 5月:親株、6月~:育苗ほ)

◎夏秋キュウリ (高冷地)

1) ベと病

- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 8月の防除員報告では、平年比やや多の発生であった(+)
- (3) 対策 ア 湿度が高い条件や肥料切れで多発するので、適正な肥培管理と排水に努め、過湿を避ける。
イ 発生後は防除が困難なので予防防除を徹底し、薬剤が葉裏に十分かかるように散布する。
ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎夏秋果菜類（平坦地）

1) コナジラミ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月上～中旬に野外に設置した黄色粘着板（10×10cm）の誘殺数は、熊本市で2.8頭/日/枚（平成2.3頭/日/枚）で平成比やや多、山鹿市で1.5頭/日/枚（平成2.5頭/日/枚）で平成比やや少、菊池が0.1頭/日/枚（平成1.3頭/日/枚）で平成比少であった（－）。

イ 8月の防除員報告ではナスで平成比やや多～並、メロンで平成比やや多～少の発生であった（＋）。

(3) 対策 ア 密度が高くなると各発育ステージが混在し防除が困難となるため、低密度での防除を徹底する。

イ 施設内部と周辺の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

ウ 密度が高くなると防除が困難となるため、黄色粘着トラップ等を施設内に設置し、早期発見に努める。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

2) アザミウマ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の防除員報告では、ナスで平成比やや多～並、メロンで平成比やや多～少の発生であった（＋）。

(3) 対策 ア 粘着トラップ等を設置し、早期発見に努める。粘着トラップの色は、ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する。

イ ミナミキイロアザミウマはウリ類黄化えそ病の病原ウイルスを、ミカンキイロアザミウマはトマト黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類およびトマトでは本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（**3防除のポイント等の「野菜のウイルス病対策」**を参照）。

ウ 施設内部と周辺の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

◎野菜類全般

1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査において、トマトおよびイチゴで発生を認めず（平成トマト0.0%、イチゴ0.3%）、平成並の発生であった（±）。

イ フェロモントラップによる7月第5半旬から8月第4半旬の誘殺数は、阿蘇市一の宮が1,432頭（平成1,193頭）で平成並、合志市栄が529頭（平成958頭）で平成比やや少であった（－）。

(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期に防除を行う。

イ 施設栽培では、成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。なお、ネット上に産卵し、ふ化幼虫が施設内に侵入することもあるので注意する。

ウ 卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したらただちに除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



3 防除のポイント等

早植え水稻におけるトビイロウンカの防除対策

本年はトビイロウンカの飛来量が多く、発生ほ場率も高いことから令和2年8月17日にトビイロウンカの病害虫発生予察警報を発令しています。特に早植え水稻では発生量が平年より多く、要防除水準を超えるほ場も多く見られるため、これから収穫期を迎えますが以下の防除対策を徹底しましょう。

- (1) 無防除田やイミダクロプリド等の感受性が低下した箱施薬剤を使用したほ場では、寄生密度が要防除水準（収穫30日前：30頭/10株）を超え、かなり高くなっていることが予想される。必ずほ場での発生状況を確認し、要防除水準を超える場合は、直ちに防除を行う。
- (2) 防除を行っているほ場でも、発生状況を確認し、要防除水準を超える場合は、直ちに防除を行う。
- (3) 防除を行う際は、収穫前使用日数を遵守する。
- (4) 刈り遅れがないように適期に収穫する。坪枯れが発生し始めたら、可能な限り収穫を早め、坪枯れに伴う減収被害の拡大を防ぐ。

水稻病害虫防除にあたっての農薬危害防止の徹底について

斑点米カメムシ類やトビイロウンカ等を対象とした防除にあたっては、農薬使用による周辺住民やミツバチ等への危害が発生しないよう、以下の事項を遵守し、危害防止対策を徹底しましょう。

- (1) 農薬を使用する場合は、関係法令等を遵守するとともに、事前に農薬を散布する日時、使用する農薬の種類等について、周辺住民等へ周知を行うこと。
- (2) 周辺の養蜂家と巣箱の位置や防除計画について、事前に情報を交換すること。また、防除を行う際には、「蜜蜂飼育関係集計表」等を基に、巣箱の位置を確認し、ミツバチや巣箱に農薬がかからないよう、ほ場周辺を十分に確認すること。
- (3) 農薬散布の際は、散布区域内及びその周辺における危害防止に万全を期すとともに、作業関係者の安全について十分留意すること。



野菜のウイルス病対策 「入れない」対策をしましょう

本県では「トマト黄化葉巻病」、「トマト黄化病」、「キュウリ・メロン黄化えそ病」、「キュウリ・メロン退緑黄化病」などのウイルス病が発生しています。これらの病気の原因となる各ウイルスは、コナジラミやアザミウマ等の微小害虫により媒介されます。

この微小害虫は、気温が高い時期には活発に活動します。また、これから定植を行う作型では、育苗期や定植直後にウイルスに感染するリスクが高まる時期です。

そこで、以下の対策を必ず行いましょう。

保毒虫を栽培ほ場に「入れない」対策

上記のウイルス病は、微小害虫がいなければ感染しません。そこで、野外から微小害虫を施設内に入れないようにしましょう。感染が早ければ早い程、経済的被害は大きいので、特に育苗期の対策はしっかり行いましょう。

□育苗期

- ① 育苗ハウスは、本ぼと別に設け、ハウスの開口部（サイド、換気部など）には必ず目合い0.4mm以下の防虫ネットで、天井部は近紫外線除去フィルムで被覆する。
- ② 雑草および野良生えは微小害虫のすみかとなるため、ハウス内・周囲から除去する。
- ③ ハウス内に粘着トラップを設置し、侵入した害虫の密度を低下させる。
- ④ 発病株は二次伝染源となるので、見つけ次第直ちに施設外に持ち出し処分する。
- ⑤ 定植2～3日前に、「育苗期後半」に登録のある薬剤を処理する。

□本ぼ定植前～定植時

- ① サイド開口部は目合い0.4mm（アザミウマ対策の場合は目合い1mm以下）の防虫ネット、谷換気部は、目合い1mm以下の防虫ネットで被覆する。
- ② ハウス周辺に雑草および野良生えは定植10日前までに除去する。
- ③ 育苗ハウスから本ぼへ苗を運ぶ際には、野外の微小害虫が付かないように運搬車等の荷台を防虫ネットや幌等で覆う。また、定植作業中は、出入口をきちんと閉めて作業する。
- ④ 育苗期後半に薬剤処理ができていない場合には、定植時に登録のある薬剤を必ず処理する。



イチゴ定植前のうどんこ病、炭疽病およびハダニ類の防除対策

イチゴはこれから定植がはじまります。重要病害虫のうどんこ病、炭疽病、ハダニ類は定植前の防除を徹底して、本ぼにり病株、寄生株を持ち込まないことが重要です。以下の防除対策を徹底して、定植後の発生を抑制しましょう。

1. うどんこ病

- ① 発生しやすい葉裏を注意して観察し、初期発見に努める。
- ② 発病葉や不要な下葉は早めに取り除き処分する。
- ③ 定植前に薬剤防除を徹底する。薬剤は葉裏に十分かかるように散布する。
- ④ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

2. 炭疽病

- ① 定植まで育苗床の雨よけを必ず行う（寒冷紗は雨よけにならない）。
- ② 育苗床は、冠水しないように排水対策を講じる。
- ③ 頭上かん水は避け、株元に手かん水する。
- ④ 定植まで定期的に予防防除を行う。特に、降雨後、摘葉後、ランナー切除後は感染しやすいので必ず防除する。
- ⑤ 発病株は速やかにほ場外に持ち出し、ビニール袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。
- ⑥ 苗不足により、緊急的に苗を確保する場合は、発生していないほ場から確保する。

3. ハダニ類

- ① ほ場内および周辺の雑草は定期的に除草する。
- ② ハダニ類は下葉の裏に多く寄生しているので、老化葉は積極的に除去する。
- ③ 除去した下葉は、ほ場外に持ち出し、速やかに処分する。
- ④ 薬剤防除の際は、薬液が葉裏に十分かかるように、苗の間隔を十分確保し、丁寧に散布する。
- ⑤ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、気門封鎖剤などの物理的資材を積極的に活用する。気門封鎖剤は、ハダニ類に直接付着しないと効果がないため、特に丁寧に散布する。また、卵への効果や残効性が無いため、5～7日の間隔で複数回散布する。なお、気門封鎖剤は高温時など薬害が生じやすい条件での使用は避ける。
- ⑥ 殺ダニ剤は、同一系統薬剤の連用を避け、育苗から本ぼでの栽培期間を通し計画的に使用する。
- ⑦ 本ぼにおいて、天敵（チリカブリダニ、ミヤコカブリダニ）を使用する場合には、天敵への影響が残る期間を考慮し、薬剤の種類や使用時期に注意する。

III 【その他の病害虫】



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

[「http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/」](http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/)

作物	病虫害名	発生予想 (平年比)	発生概況及び注意すべき事項等
普通期 水稻	紋枯病	やや多	巡回調査は平年並(±)。 出穂期以降高温が続くと上位葉鞘に病斑が進展するため、発生が多い場合は防除を行う。
	斑点米 カメムシ類	やや多	巡回調査(早植え水稻)では平年並(±)。 常発地帯では2回目の防除を穂揃い期の7~10日後に行う。
カンキツ	チャノキイロ アザミウマ	やや多	巡回調査は平年並(±)。 防除員報告は平年比やや多~やや少(-)。 黄色粘着トラップ調査は平年比多(+) 果実(100果)を薄めた展着液または洗剤で洗い、捕獲された虫数が10頭を超えた場合は防除を行う。
ナシ	うどんこ病	並	巡回調査は平年並(±)。 晴天・乾燥が続くと多発する。 早期落葉により樹勢が低下するので、予防防除を徹底する。
カキ	炭疽病	並	防除員報告は平年比やや少(-)。 発病枝は園外で処分し、病原菌の密度を下げる。 発病後の防除では効果が低いので、予防散布を徹底する
イチゴ	うどんこ病	並	巡回調査では、平年並(±)。 防除については、3防除のポイント等の「 イチゴ定植前のうどんこ病、炭疽病およびハダニ類の防除対策 」を参照する。
夏秋 果菜類 (高冷地)	コナジラミ類	やや少	巡回調査では、トマトで平年比少(-)。 現在発生しているほ場では、早期に防除する。
夏秋ナス (平坦地)	すすかび病	並	防除員報告は、平年並(±)。 葉裏にも十分かかるよう薬剤散布を行う。
夏秋 キュウリ (高冷地)	うどんこ病	やや少	防除員報告は平年比やや少(-)。 初期発生を認めたら直ちに薬剤防除を行う。
露地キク	白さび病	並	防除員報告は、平年並(±)。 罹病葉が伝染源となって感染が拡大するので、罹病葉は早めに除去し、適切に処分する。
<p>【野菜病虫害の共通対策事項】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める(病害)。 ・多発後は防除が困難になるので、早期発見と初期防除に努める。 ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。 			



IV その他

農薬安全使用上の留意点

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

◎ 詳しい内容等については 病害虫防除所(生産環境研究所病害虫研究室)
(TEL：096-248-6490)にお問い合わせ下さい。

※ なお、本文及び各種トラップのデータ等はホームページ
「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」上に掲載しています。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」